

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	谷 口 知 美
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
授業研究に対するダイナミック・アセスメントの意義と役割に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	深 澤	広 明
審査委員	教 授	七木田	敦
審査委員	教 授	丸 山	恭 司
審査委員	准教授	吉 田	成 章
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」に由来するダイナミック・アセスメントを対象に、子どもの学びと発達を保障する授業のあり方を追究する観点から、ダイナミック・アセスメントの授業研究に対する意義と役割を検討したものである。「発達の最近接領域」とは、子どもが一人で解決できる現下の発達水準と大人の指導や仲間との共同で解決できる可能的な発達水準との「へだたり」として規定されるものであり、その「発達の最近接領域」を評価するのがダイナミック・アセスメントである。ダイナミック・アセスメントでは、学習者の応答に対して即時の介入が行われ、学習者がそれを利用し課題解決を進めることになる。したがって、どのような介入をすれば発達を促すことができるのかという介入方法の評価をとまなうことから、ダイナミック・アセスメントは、教師と学習者の相互作用を分析する授業研究の手法にもなる。ただし、先行研究の検討でも明らかにしているように、ダイナミック・アセスメントのはじまりといわれる学校の教育内容を使用しないフォイヤーシュタインの研究や学校の教育内容を使用する場合でも「介入主義者」と「相互作用主義者」の実践研究が混在しており、学校現場で日常的に行われている授業研究に対するダイナミック・アセスメントの意義と役割を明らかにすることは、子ども一人ひとりの学びと発達を保障する授業改善にとって重要な課題である。本論文は、そうした課題に、源流であるヴィゴツキーに立ち返りながらダイナミック・アセスメントの展開を明らかにする理論的アプローチとともに、学校の教育内容に依拠している具体的な授業研究の事例をふまえた実践的アプローチとを組み合わせ取り組んでいる。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、「成熟しつつある機能」として動的に捉えられた知的発達を先導する「正しく組織された教授・学習」をヴィゴツキーの文献の検討を通して理論的に明らかにするとともに、日本の教育学研究における「発達の最近接領域」の受容を整理し、ダイナミック・アセスメントの必要性について論じている。</p> <p>第2章では、ダイナミック・アセスメントのはじまりとしてのフォイヤーシュタインと源流としてのヴィゴツキーとの接点を明らかにするとともに、ダイナミック・アセスメントが学校の教育内容を課題としないものから学校のカリキュラムに依拠して開発されてき</p>			

た経緯を整理している。

第3章では、小学6年算数の教育内容に依拠したダイナミック・アセスメントについて、つまずきを共有して全員で解決していく一斉授業と概念理解が不十分な児童を対象とした個別指導との二つの場面で試み、ダイナミック・アセスメントが閉ざされた実験室ではなく通常の教室で使用できることを具体的に示している。

第4章では、ダイナミック・アセスメントに関する「介入主義者」と「相互作用主義者」との論議を検討することで、「相互作用主義者」のアプローチの意義と課題を整理するとともに、グループ学習の研究から仲間の媒介と教師の媒介の質的な違いに言及している。

第5章では、中学3年社会科の授業研究における一斉授業とグループ学習の場面でのダイナミック・アセスメントを試み、生徒の誤答から教師が「現下の発達水準」を捉え、翌日の授業で示すヒントや追加資料が「発達の最近接領域」に見合うものかを事後テストで分析するとともに、抽出生徒の発達を促進する教師の積極的介入の姿を描いている。

第6章では、授業研究におけるダイナミック・アセスメントの役割が、「どこで学びが成立したか」を視点とする「学びの共同体」では捉えられない子どもの変容を捉えるところにあり、抽出児童・生徒に焦点を当ててダイナミック・アセスメントの効果を吟味し合う授業研究のあり方をモデルとして提示している。

本論文は、次の5点で高く評価できる。

1. ダイナミック・アセスメントのはじまりとされるフォイヤーシュタインは、ピアジェに師事しておりヴィゴツキーを学んだ形跡がないとされてきたが、関連文献を精査することで、フォイヤーシュタインがルリヤを媒介としながらヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の概念に言及してダイナミック・アセスメントを構築していることを見いだしている。
2. ダイナミック・アセスメントに関する「介入主義者」と「相互作用主義者」とのアプローチを比較検討することで、学習者の反応に応じた介入がどのような発達を促すかを目的とする「相互作用主義者」のダイナミック・アセスメントが教室での学習に適しており、そこに授業研究に対する意義のあることを明らかにしている。
3. 「相互作用主義者」のアプローチからのダイナミック・アセスメントを通常教室における教科内容の理解を志向する一斉授業と個別指導、一斉授業とグループ授業を対象とする実践研究で試み、授業研究におけるダイナミック・アセスメントの可能性を提起している。
4. ダイナミック・アセスメントの実践的研究を通して、子どもの学習のなかでのつまずきや到達点を把握しつつ教師が介入することで「可能的発達水準」を探り出そうとする教師の介入のあり方を具体的レベルで示すことで、ダイナミック・アセスメントの授業研究に対する役割を明らかにしている。
5. 子どもの「学びの成立」についてダイナミック・アセスメントは教師の介入と連動させて捉え直す視点を提供できる点に、授業研究における子どもの見取りに対するダイナミック・アセスメントが果たすべき役割を提示している。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。

令和 3年 2月 9日